

# 発達保障の道

～歴史をつなぐ、社会をつくる

【第3回】

歴史のなかに「いのち」をつなぐ営みを求めて



金沢大学  
河合隆平

かわい りゅうへい  
1978年福井県生まれ。金沢大学准教授、全障研常任全国委員。専門は、障害児教育学。著書に『発達保障ってなに？』共著（全障研出版部）など。

## 生きることが問われる時代

最近、私たちの「生活」や「いのち」に深く関わる子育てや教育、福祉の歴史を通して、「生きる」という人間の根元的な営みや意味が問い直されています。そのなかで興味深いのが「捨て子」の研究です。江戸時代の捨て子を研究されている沢山美果子さんによれば、江戸時代の捨て子は、子どもと親のいのちを共に守るためのやむを得ない選択肢としてある程度許容されており、捨て子は地域や家族相互のネットワークによって救われ、育てられていたそうです（沢山、2008）。

今日、子どもを捨てることは養育責任を放棄する身勝手な行為とされ、個人とりわけ母親の責任感や倫理観の無さが強く非難されます。ですから、捨て子が許される社会をただちにイメージしにくいです。子どもをいのちを守る「第一義的責任」は親にある。改正児童福祉法もそう言っています。しかし、個人の責任やモラルだけを強調すると、見えなくなるものはないでしょうか。捨て子の歴史は、私たちが何よりも価値を置く「いのちを守る」という営みについて、ほんの少し視点をずらして見直すきっかけを与えてくれると思うのです。

## 江戸時代の捨て子

沢山さんの著書『江戸の捨て子たち』（2008）に学びながら、歴史のなかの捨て子たちの姿をみてみよう。

寛政11（1799）年6月11日の朝六つ半（午前7時頃）、江戸の岡山藩の下屋敷の門のそばに男の子が捨てられていました。男の子はいくつかの布を継ぎ合

わせた縞の古袴と襦袢を着せられ、小布団に置かれていました。身体にはなく、子どもの脇には「絹継々綿入」「紋帷子」「木綿襦袢」などのいくつかの着替えや手ぬぐい、腹掛け、枕などが添えられ、守袋にはお守りと「一月八日やす二郎」と書かれた紙に包まれた産髪とへその緒が入れてありました。

生後7ヶ月のやす二郎はまず屋敷の役人に引き取られ、その妻たちから乳が与えられます。その後、捨て子の発見者であり、屋敷に出入りもあつた百姓の勘久郎が貰い受けたいと願ひ出たので、藩による吟味の結果、信頼できる人物であると判断され、発見から5日後やす二郎は養育金三両を添えて引き渡されることになりました（25～28ページ）。

## いのちへのねがいと生きるための苦悩

江戸後期の岡山城下の捨て子記録77件（1801～1860年）を調査した沢山さんによると、男子が29件、女子が48件と女子が全体の62%を占めており、年齢は生後1歳未満が60人（78%）、そのうち17人（28%）が生後1ヵ月未満でした。人通りの多い街道沿いにある、裕福な町人や役人の屋敷の戸口で発見されることが多く、発見時刻は人目につきにくく、さりとて人通りが絶えてしまわない午後8時から11時頃に集中していました。子どもの傍には産髪やへその緒を添えた手紙が置かれ、寝具や衣類などのほか、お金、子どもの未来安全を祈願する羽子板、扇子、脇差（守り刀）などの所持品を伴っていたそうです。

立派な衣類や品々を添えるだけの余裕がある家もありましたが、捨て子をした多くは生活が苦しい下層の人間とであり、生活難、親の離別や死別、病氣、乳が出ないという理由のほか、婚外子など事情はさまざまでした。

とはいえ、捨て子の作法からは、わが子が誰かに確実に拾われることを期待し、無事に生き延びてほしいとねがう親心がうかがい知れます。子どもが生後すぐではなく、しばらく育ててから捨てられていたことも、子どものいのちをつなぐことへのねがいの表れといえます。

生後10ヵ月で捨てられた女の子に添えられた手紙の最後に書かれた「おめしにやかし候へハすいふんたへ申候」（ご飯を返して与えれば随分食べるだろう）という文からは、離乳期にさしかかったわが子のいのちへの気遣いが読み取れます。別の手紙には「なさけなき浮世のために子を捨て我身を立てる親の心ぞ」（無情な世間を渡するために、子を捨てても、我が身を立てるを得ない親の心をお察しください）という歌が書き添えられていたそうです。これらの手紙からは、捨て子が許されない行為だと知りつつ、親子が共に生き延びるために、わが子のいのちを他人に託そうとした親たちの苦悩といのちへのねがいを想像することができます。

## 「家」を守ることと子どもの成長へのねがい

江戸後期になると、人びとは夫婦と子どもからなる家族をつくり、親の代から受け継いだ「家」の存続に努めていきます。家族にとって子どもは貴重な働き手であり、「家」を継ぐ男子を確保するためにも子どもをたくさん産む必要がありました。なぜなら、子どもが無事に産まれて育つための難関がいくつもあつたからです。

18～19世紀の日本では、出産のうち10～15%は死産であり、肺炎・気管支炎、下痢、腸炎などによって1歳未満で亡くなる子どもは20%、16歳まで生き延びることができたのは全体の約50%でした（鬼頭、2000）。一方、子どもをたくさん産むために妊娠を繰り返す女性のなかには、妊娠中の病氣や出産が原因で亡くなる人もた